

豆の大木 新潟

あつたと

むかし、あるところに、じいさんとばあさんがいました。

ある日、じいさんは土間どまをはいていました。ばあさんは座敷ざしきをはいていました。すると、土間に大きな豆まめが落ちていました。じいさんは、

「この豆まめ、種たねにして畑にまう」といいました。するとばあさんは、

「いや、この豆まめは、いつて食べよう」といいます。

とうとうけんかになってしましました。しまいにはばあさんが負けて、じいさんは、豆まめを

畑にまきました。

豆まめは、やがて芽めを出して、ずんずんのびて天までとどきました。

じいさんは、なたで豆まめをもぎもぎ、豆まめの木を登つていきました。すると、なんだかもやんとしたところへ出ました。そこは雲の上で、雷かみなりさまが昼寝ひるねをしていました。雷かみなりさまは目をさまして、

「おう、じいさん、来たか。昼寝起きに夕立ふらせるが、おまえ、ちょっと手伝えや」と
いいました。

「手伝うつて、どうしたらいいんだ」

「いや、たいしたことない。おれが、ぴかぴかごろごろ、光を出したり、音を出したりするから、じいさんおまえ、手おけの中にはしを入れて、水をひとつたらしづつ下の世界にたらせ。いい夕立になるから」

それから、雷かみなりさまは、じいさんに、たにしのようなしこしこしたうまいものをくれました。じいさんが、

「これは、なんでもんだ」ときくと、雷かみなりさまは、

「それは、子どものへそだ。はだかでいた子どものへそを取つてきて煮たものだ」といいました。

さあそれから夕立を始めました。雷かみなりさまが、ぴかぴかごろごろると、じいさんは、手おけの水に箸を入れてタクンと下にたらしました。そしたら、ざあざあ大雨になりました。じいさんはおもしろがつて、タクンタクンとたらしているうちに、手おけの水をいちどに

どうつとぶちまけてしましました。下は海のようになって、じいさんはびっくりして下へ落ちてしまったということです。

いきがぽーんとさけた

原話 ..『聾女ろうじょのこめんなんしょ昔』水沢謙一編／講談社

再話 ..村上郁